郷愁

少しく
なすがままにされた庭の土は乾き
固結してはいたが
夕陽を吸い込む程には懐を持っていた

僕は確かに図に乗りすぎていたのだ
吹きつける風に手をかざし
自分(おのれ)でのみありうることができたなどと

この大気が
陽光(ひかり)の充満するこの大気が
この僕を包み込む大気が
何らの慄えをも運ぶことはないなどと———

生まれてはすぐ消える感情(こころ)は
左手にすくい取ったこの土くれの一粒一粒となり
指の間から、今
さらさらと流れ落ちて行く

現在(きょう)を視ることも
過去(きのう)を視ることも
未来(あす)を視ることも
それもみな同じことだ

何をして切り抜き留めることができよう
すべり落ちてゆくがいい、だが
やがて僕は知るだろう
郷愁という名の感情(こころ)を

(1996.5.21)